

大特集「オフィスオートメーション」の編集にあたって

真 汐 雅 彦[†] 高 木 明 啓[†] 鈴 木 泰 次^{††}
 杉 本 正 勝^{†††} 河 田 汎^{††††}

オフィスオートメーションは、オフィスの装備を充実・機械化して、オフィス作業を省力化・高度化することをねらいとしている。

従来、計算機は数値を主体としたデータ処理を中心に発展してきたが、計算機そのものが高価であること、その操作に専門知識を必要とすることなどの理由で、オフィスの装置としては十分普及するに到らなかった。

一方、最近のハードウェア技術、特に半導体製造技術の進歩は著しく、マイクロプロセッサや 64 K ビット/チップのメモリ等を用いることで、一昔前の中型計算機の能力を持つものが、大変安価に利用できるようになってきた。さらに半導体製造技術をはじめとするハードウェア技術は、今後とも大いに発展することが確実視されている。

このような時期における「情報処理」関係者の役割は、これらの安価になったハードウェアを大いに利用して、新しい便利な機能をオフィスに提供することにあるといってもよいであろう。ここ 2~3 年の間にファクシミリ装置の普及、日本語ワードプロセッサ、データベース問合せのエンドユーザ言語、音声認識装置等の登場というように、急速にこの分野が発展してきている。

従来 DP システムを扱う人は、オフィスの作業者の数からみれば、ごく少数の DP 専門家であるのに対

して、オフィスオートメーションを利用する人は、一般社会人でありその数は多いし、情報処理の専門家ではない。そのため、システムの利用しやすさが最重要になり、マンマシンインタフェースや知識情報処理についての細心の考慮をした設計が要求されてくる。

そこで、現在の時点で、オフィスオートメーションの現状、問題点、理想像、知識情報処理といった新しい学問分野を展望してみる必要があると判断して本特集号を企画した。

以上のように、オフィスオートメーションの技術は単なる個別製品技術の組合せではなく、オフィス業務に伴う文字、図形、画像、音声の転送（通信）や処理の統合化・総合化を志向するシステム技術であることから、本特集号では、要素技術、事例の列挙のみならず、特に以下のような視点を重視した。

- (1) 文字、図形、画像、音声情報の転送や処理の統合化（ネットワーク化）
- (2) 個別ツール（情報の投入、転送、蓄積、検索、加工）の複合化・統合化
- (3) 標準化・汎用化技術とこの技術をベースとしたサービスの個別化・カスタム化
- (4) オフィスオートメーションの展開とともに、重要になってくる情報処理関係の学問分野

本特集号が、情報処理学会の会員諸氏に多少とも役立ち、また今後のオフィスオートメーションの発展の一助となれば幸いです。

おわりに、時間的な制約にもかかわらず快く執筆をお引き受けくださった執筆者に感謝いたします。

[†] 日本電信電話公社横須賀電気通信研究所
^{††} 日本電気(株)基本ソフトウェア開発本部
^{†††} 富士通(株)開発技術部
^{††††} 富士通(株)ソフトウェア技術部